

俳句通信

特別作品25句●松岡隆子「波音へ」

特集●「70代俳人」その3

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 足立和子(鹿火屋)「夏旺ん」 | 島田藤江(知母)「螢袋」 |
| 庵崎京子(若葉)「季のうつり」 | 田辺百子(時)「薔薇の園」 |
| 石川笙児(沖)「東北へ」 | 中川欽子(柳)「忘草」 |
| 浦城悠紀(秋風)「香水」 | 中谷まもる(風鈴)「茶山より」 |
| 大倉恵子(青海波)「額の花」 | 西尾玲子(棋)「螢籠」 |
| 岡田つばな(若竹)「句碑開き」 | 西村妙子(山茶花)「清水湧く」 |
| 落合美佐子(浮野)「万緑」 | 暮目良雨(春耕)「逢へさうで」 |
| 加藤信子(海)「縄文の女神」 | 麻殖生伸子(藍)「折鶴」 |
| 川村五子(岳)「畢宿」 | 松本誠司(寒露)「梅雨夕焼」 |
| 喜多杜子(春月)「龍枕」 | 村田浩子(笹)「九輪草」 |
| 小島一慶(玉藻)「かなかな」 | 山崎照三(いには)「朱夏へ」 |
| 斎藤史子(今)「ありありと」 | 山元正規(銀漢)「南風」 |
| 佐藤一星(風の道)「明易し」 | |



【特別寄稿】

「俳句言語にとって美とはなにか
一俳句の表出論の試み一(その4)」
西池冬扇

【実力作家競詠20句】

秦 夕美「鏡のくに」
中村幸子「烏柄杓」
波戸岡旭「松籟」

【実力作家近作20句】

船越淑子「お瀧道」
石渡 句「平城」
向田貴子「半夏生」

●作品●

田中水桜・下鉢清子・関口恭代・保坂リエ・加藤耕子・鈴木節子・
大串 章・須原和男・菊地一雄・福井貞子・奈良文夫・佐久間慧子・
檜 紀代・瀬戸清子・鈴木太郎・草深昌子・中村正幸・西池みどり・
広瀬恵美子・遠藤由樹子・原 朝子ほか

●好評エッセイ●

先人に学ぶ俳句「飯田蛇笏(七)」——句集「山響集」(一)岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景——青光会への出席」井上康明
戦後俳句の戦術「秋桜子・波郷・登四郎・洲子——波郷との確執」筑紫磐井
岡本幹の俳句「春愁のペレー帽——「十指」小川英知子
虚子の肖像「虚子と詩と戦争のこと」坊城俊樹
時空の座・拾遺「芭蕉と住まう」西池冬扇
地味で変な虚子句 五句集を読む「自在なる老境へ」阪西敦子
虚子散文の世界へ「紀行文など」本井 英



書齋にて

池田啓三



秋茱萸 (あきごみ)

秋ぐみのかくて赤らむ風雨急
茱萸は黄に乙女めくなり吾がちぶさ

前田普羅
三橋鷹女

かまきり

山国で育った私は三人兄弟の長女で、弟が二人、家に遊びに来る弟の友だちとよく遊んだ。川で魚を掬ったり、近くの山へ甲虫やクワガタを捕りにも行った。蟬を素手で捕えることもどちらかと言えば得意な方だった。

ただ、何故かかまきりが苦手だった。三角の貌に飛びだした目が怖かった。器用にかざす鎌に本当にひっかけられそうな気がした。母が絶対触ってはいけないと言っていたナナフシ(毒かまきりと教えられていた)に似ていたからかもしれない。そんな私のかまきり嫌いを知っていた学友が一度いたすらで休み時間に私の筆箱にかまきりを入れたことがあった。授業が始まって筆箱を開けた途端、私は叫び声を上げて教室から飛び出した。その学友とは卒業以来逢っていないが、丸刈り頭の悪戯っぽい顔をはっきり思い出すことが出来る。

俳句をするようになって四十数年、今はすべての虫たちがいとおいしくなった。

蟬蟬生るみな三角の貌をして 早智子

波音へ

松岡隆子

六月の巖をすべる水の色
木天蓼の花の山氣をかんばせに
滝音へ近づく山氣踏みしむる
滝落つるはじめの水の躍るなり
瀑布落つ整然として杉木立
滝音にゐて刻々と時失くす

特集

70代俳人

その3

〈70代俳人〉の特集・その3です。

各結社で活躍する70代の俳人、その作品を広くご紹介していく予定です。

今回も各結社の主宰・代表から推薦していただいた実力作家25人が揃いました。

秋桜子・波郷・登四郎・湘子

筑紫磐井

波郷との確執

今回は「ぬばたまの黒飴さはに良寛忌」の句（二三年三月巻頭）をめぐる波郷と登四郎の争いを眺めて見たい。波郷のぬばたま批判が初めて活字になるのは次の文章による。

「能村登四郎氏が水谷晴光氏の法隆寺四句を、馬酔木調の綺麗事で現代的な句ひが乏しいとし、斯かる新古典派的魅力を現代の若い作家が追ふのはどうかといひ乍ら、今後の馬酔木の句は斯くあるべしとして『しらたまの飯に酢をうつ春祭』の句を挙げてゐるのは合点がゆかない。この句や能村氏自身の『ぬばたまの黒飴さマに良寛忌』の方がかへつて法隆寺の句よりも非現代的と、僕などには思へる。かういふ考へが新人会あたりで不思議とされないのだつたらこれは問題であらう。」（『仰臥日記』——『馬酔木』二四年三月）

これだけでは経緯が分からないであろう。批判される登四郎の文章があるのである。実は馬酔木二三年十二月号の新詩集で秋桜子の巻頭となつた作品「公直二二二二二二」

け月を待つ」「十六夜の脇戸くぐるや苔句ふ」「坊更けてはばかり歩む月の縁」「勤行に参ずる暁の霧ふかき」を登四郎が批判した文章であつたのである。そしてそこで、水谷の巻頭句である法隆寺四句に対し、登四郎は「しらたまの飯に酢をうつ春祭（二三年六月三席）」をよしとし、この句の持つ豊饒さに敬服したと述べたのである。

ところがこれを波郷は「しらたまの飯に酢をうつ春祭」「ぬばたまの黒飴さはに良寛忌」ともども法隆寺の句よりも非現代的と思える、と述べている。

確かに法隆寺の句が現代的であるとは思えないのであるが、二つの傾向の比較はこの論戦の中で消滅している。ただ「しらたま」「ぬばたま」ともに典雅な趣味の句であることに間違いはない。それを波郷は批判したのである。

ところで、波郷は能村登四郎の傷跡に再度、塩を塗るようなことをするのである。それは、依頼された句集『咀嚼音』の跋文で再び批判をしていることである。

「私が青原寸へ、秋桜子の『二二二二二二』を、馬酔木二二二二二二」



前列右から 渡辺氏、水谷氏、
後列右から 蓮見氏、大島氏、星野氏、藤本氏

ゲスト

大島英昭・蓮見勝朗
水谷由美子・渡辺 澄

ホスト

藤本美和子

編集長 超結社句会の第28回目です。ゲストは「やぶれ傘」

同人の大島英昭さん、「鶴」同人の蓮見勝朗さん、「青山」同

人の水谷由美子さん、「響焰」同人の渡辺澄さん。今回のホ

ストは「泉」主宰の藤本美和子さん、お一人です。「玉藻」

主宰の星野高士さんはご都合により、ご欠席です。遠慮のな

い意見交換をお願いします。

美和子 点の入った句から行きたいと思います。4点句か

ら。

水槽に小石ばかりや梅雨籠り

英昭 雨に降り込められて自宅でやることもないようなアン

ニユイな気持ち。水槽には以前は金魚がいたのに。いまは小

石ばかりになっている景と受け止めました。

由美子 「梅雨籠り」が効いていると思いました。

澄 「水槽」はいうまでもなく、金魚とかが泳ぐということ

が前提にあるんですけど、「小石ばかりや」で金魚もいない、

水も張っていない寂寥感が出ていて、お上手だと思いまし

た。

美和子 まだ水が張られていない、石だけの空の水槽という

(英曲鏡美)